

見て感じる 「ボク宝」のススメ

現在の仏像ブームの火付け役で、コアなファン層から絶大な支持を受ける、イラストレーターのみうらじゅん氏。
かたや地元僧侶の立場から、柔らかな発想で奈良観光を全国に発信する、海龍王寺住職の石川重元氏。

各フィールドで活躍中のお二人に、
仏像がいざなう自分らしい奈良観光について、
天平文化の真ん中・平城宮跡で語っていただきました。

近くて遠い？ 仏像との距離

石川住職(以下、石川) 奈良に来られるようになって、どれぐらいになりますか？

みうらじゅん(以下、みうら) 小4の時からですから、結構長いですね。実家が京都だったので、一人でもよく来てました。落ち着くから、つい東大寺の法華堂で寝入ってしまったたりとか(笑)

石川 怒られませんでしたか？(笑)

みうら お寺も小さな子どもには優しくかったですね(笑)。昔は東大寺の戒壇堂は須弥壇まで上がったもので、ほぼ天平仏に触れるぐらいまで近寄って拝観しましたしね。でも僕が小6ぐらいの時でしたか、京都の広隆寺の弥勒菩薩像の指が折られる事件がありましたね。

石川 学生がそのあまりの美しさに像に触れ、指を折ってしまったとか。

みうら そうだったんですね。あれからお寺も管理が厳しくなったんですよ。文化的な保護のために、仏像が遠くなくなりました。でも、興福寺創建1300年記念として東京国立博物館で開催された「阿修羅展」あたりから、仏像をぐるり360度見られるようになって。子どもの頃の、仏像にすごく接近してたあの感じは、今は博物館の方が近い気がしますね。

石川 僕自身はお寺で生まれて、仏像が日常の生活の中になりましたから、博物館のガラスの向こうにあるというのがすごく残念ですね。人間が悪いことをするので、仏さんとの距離を遠くしなければならぬ。それだけ世の中が悪くなつてしまったことに、もどかしさを感じます。

若い人にも開かれた門戸

みうら もともと自分が仏像を好きになった入口って、完璧に特撮の世界なんです。手が何本もあったり、目が何個もあるっていう密教仏の異形のかっこよさを、教科書や宗教より前に見てしまった(笑)

石川 みうらさんらしいですね(笑)
みうら 仏像って、本当にかっこよく造つてあるなと感心して。きつと、その時代だけを象徴するものだったら、こんなにも長く残ってないと思うんです。だから、そういう見方でも、お寺が入口の門戸を広げてくだされば、きつと若い人も興味を持つきっかけとなるはず。仏像エッセイの『見仏記』も、始めたころはよくお寺側から「拝むものに対して『見る』なんて！」って怒られましたけど、尊厳という気持ちを否定するわけじゃなくて、自分としては「こういう見方もあっていいんじゃないか？」という提示だったんですが。

石川 僕は、人それぞれの捉え方で、仏像を見たり拝んだりしてもらったらいいと思います。一般の方々の感じ方を素直に受け止めた上で、じゃあ今度はお寺側からどう返していくか、ということが我々の宿題だと思えます。残念ながらまだ答えは出ていませんが、「阿修羅展」は一つの確かなターニングポイントになりました。あれから若い方々が仏像に興味を持ち、仏さんと向き合ってくれるようになったと思います。

みうらじゅん

イラストレーター、エッセイスト、漫画家など
1958年、京都市生まれ。1980年、武蔵野美術大学在学中に漫画家デビュー。1997年、「マイブーム」で新語・流行語大賞受賞。2005年、日本映画批評家大賞功労賞受賞。『見仏記』シリーズ(いとうせいこう氏との共著)、『アイデン&ティティ』、『色即ぜねれいしん』など著書多数。

いしかわ じゅうげん 石川 重元

真言律宗 海龍王寺 住職

1966年、奈良市生まれ。平成元年に種智院大学卒業後、京都仁和寺での修行を経て、1991年より海龍王寺住職。ツイッターやFacebookなど時代の変化を受け入れた「新しい仏教のありかた」を探りながら仏教活動に尽力している。

■ 講話予定

◎平成27年3月14日(土)
「奈良まほろば館」(東京・日本橋)にて
時間は14:00～、16:00～の2回(定員各70名)。
詳細は決まり次第、「奈良まほろば館」ホームページにて。<http://www.mahoroba-kan.jp/>

◎平成27年4月
関西で行われる奈良の観光キャンペーンにて
「奈良僧侶茶論」を予定。
詳細は決まり次第、海龍王寺のホームページにて。
<http://www.kairyuouji.jp/>

日本の仏像は「いい」加減



「ウィッシュュ」とは信仰なり

みうら 厳密に言えば、阿修羅って神像であって、仏像じゃないんですよ。でも、それをひっくり返して仏像って言ってしまっている日本の「いい加減」な感じが、いい加減つまり「良い加減」なんです。日本の仏像って、神仏習合ですからね、そこに深みがあるし、飽きない理由があると思います。

石川 仏像もそうですが、昔の人はいろんな文化を創り出しましたよね。その点、現代人は創り出す力が弱くなっているようにも思います。

みうら やっぱ奈良のうらやましいのは、見事な天平仏があることですね。行き着くころ、仏像って白鳳・天平ですよ。慶派、円派などの仏師の時代、腕自慢みたいな面も出始めたけれども、天平仏はその匿名性に何か素ものを見るようで、よりリアルでビュアな気がします。脱乾漆仏は大火があるから持ち出しやすいように造ってる点も、とても宗教的じゃないですか。

石川 大陸のものに憧れがあったのでしようね。競って大きなお寺を建てたり、仏像を寄進したり。その中で自分が時代の最先端だということを誇示していたのかもしれないね。

石川 うちにも聖徳太子像がありましてね。厚みが薄い、天平仏みたいな造りなんです。江戸時代の宝物帳に「聖徳太子像御自作」、つまり聖徳太子が自ら作られたと書かれているんです(笑)

みうら え!?

石川 あり得ないことだと分かってはいるんですよ。でも、何の知識もないままその仏像と対峙した時、「やっぱりそうかも…」と考えるところが面白さだと思うんです。



みうら 行基が作ったと伝わる「伝 行基作」や、空海が作ったと伝わる「伝 弘法大師作」も日本にはいっぱいありますけど、違うって言えませんよね(笑)。いわば「伝」って、「ウィッシュュ (wish)」って意味だと思っちゃいますよ。であればいいなっていう願い。でもそれこそが信仰じゃないですか。だから、いいんですよ。
石川 僕もそれだと思います(笑)

憶えるより、どう感じるか

石川 最近は小さい子どもさんも仏像に興味を持ってもらえる方が増えてきたように感じます。

みうら 仏像って、教科書で習っちゃうと勉強になっちゃいます。残念ですよ、その入口は。小さな子どもが観てるヒーローも人も、ルーツはもろ仏像にあつたりしますから。好きになるに決まっていますから。

石川 「憶えなくちゃいけない」と強制されると、しんどくなりますもんね。

みうら 知識から仏像に入っちゃうより、まずはどう感じるか、だと思っちゃいますよ。ピカソの絵だと思ってみると、知識がなくて見るのとは、全然違うのと同じ。そういった意味では、国宝とか重要文化財って書いてあるのも本当は、全部なくしちゃった方がいいんじゃないかな、とも思いますね。ぐつとくる「仏像って、そういうの関係ないですから」。

石川 子どものころは、仏像だったら何でもありがたく思ってたんですけど、知識がついたばかりに、見方が変わってしまうのはとても残念なことですね。



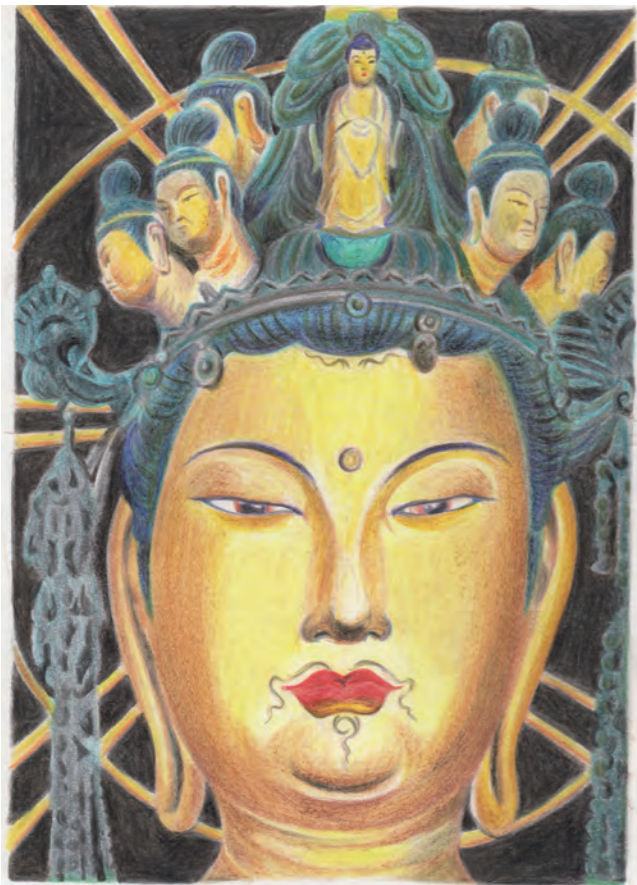
「国宝」より「ボク宝」

石川 僕は、人間ってたぶん悟れないと分かったと思うんですよ。悟れないからこそ、どうしたらいいか考えて、仏教は変わっていった。今残っている仏教や仏像は、時代の変化を素直に認める適応力があつたことを示しているのかな、とも思っています。

みうら そうですね。動物界で、自分が死ぬことを分かっている生き物って、人間くらいじゃないですか。そういう意味では、命についてすでに悟っている。死ぬのを分かっているに生きていくことって、めちゃくちゃ辛くて、何かにすがりたくなる。そこに宗教があるんじゃないですかね。「今を大切にしたい」というのは、理にかなった、一番いい宗教の真髄だと思うんですよ。



写真:平城京歴史館(遣唐使船復原展示)にて



海龍王寺の十一面観音菩薩立像(イラスト/みうらじゅん)

石川 その通りですね。

みうら いいもの見たり、知ったりすることって、いわば余生の暇つぶしみたいなもの。でも生まれた段階から余生ですからね。せつかくなら、いい暇つぶし、したいですよ(笑)

石川 そのためには、人が決めた価値判断に振り回されず、自分の価値判断で気づくことが大切ですね。

みうら 奈良に初めて来る時って予習して来がちだけど、そんな修学旅行の気持ちで二回取っ払ってみていいかも。「国宝」じゃなく自分の宝、「ボク宝」を見ようという気持ちで来ると、今まで気づかなかつた発見にすごく出会えると思いますよ。